

冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集上』（翻刻）

品川高志・家原彰子・篠原三穂
鈴木亘・関河眞克・松井美詠子

『源氏物語』の桐壺巻から賢木巻の途中までの和歌が抜き出され、歌集の体裁にまとめられている『源氏和歌集上』（冷泉家時雨亭文庫蔵）を、全文翻刻する。翻刻の掲載を許可していただいた当局に厚く御礼申し上げる。なお、考察については改めて発表する。

本歌集については、同志社大学大学院教授の岩坪健氏による大学の授業で輪読し、各々が自分の担当箇所を翻刻した。本翻刻はそれを品川高志がまとめたものである。

1、凡例

一、旧漢字は新漢字に改めることをせず、異体字もできるかぎりそのままに記す。なお、踊り字は、「ヽ」「々」「く」を区別して用いるものとする。

一、文字の翻刻にあたって、次のような原則を立てた。

①欠損などにより、文字の判読が不可能な場合は、□〔判読不能〕と表記した。

②補入のある場合は、○〔補入―○〕と表記した。例えば、山番歌「みちひる塩の○〔補入―の〕とけからぬに」では、○印の箇所「の」が補入されていることを示す。

③見せ消ちのある場合は、○〔見せ消チ―○〕と表記した。例えば、「つ」〔見せ消チ―け〕は、「つ」を消して「け」を傍記していることを示す。

④塗抹などで文字が訂正され、元の文字が明らかに判断できる場合には○〔訂正―○〕とし、判断できない場合は□〔訂正―○〕と表記した。

⑤ 擦消のある場合は、○〔擦消〕と表記した。

⑥ 傍記のある場合は、右行間に記した。

⑦ 傍記や補入以外の割注、意識的な小書き、その他、注と思われる箇所は◇で記した。また、詞書、割注の行替わりは／で記し、できる限り底本の位置になるように翻刻した。

⑧ 誤写かと思われる箇所は右行間に(ママ)と記し、正しい表記を推測できる場合は右行間に(○歟)と記した。

一、句の頭に『源氏物語』本文の歌番号を『新編国歌大観』により付した。

一、外題、内題はともに「源氏和詠集上」と表記されている。

一、9オの45番歌末句「きえん空なき」の「え」は「衣」の字母の「え」の傍らに「盈」の字母の「え」が表記されている。同様に、16オの92番詞書「おもしろくひきてあたり」の「た」は「多」の字母の「た」の傍らに「太」の字母の「た」が表記されている。

一、12ウの1行目は66番歌の詞書、2行目は68番歌となっており、その間にあるべき66番歌、67番詞書・歌、68番詞書は脱落したものと推測する。

一、14ウと15オの間は丁が切れられ81〜85番歌の箇所は欠落しているため、《脱葉》と表記した。

一、112番歌と113番歌は、掲載順が『源氏物語』本文と逆になっている

る。

2、翻刻

源氏和詠集上

桐壺(九首)

わつらふことおもくなりてまかりいてけるととき

〔于時被任三位手車官旨給／延喜帝后〕

桐壺御休所〔安察大納言女ニテ薨ス／此御子ハ光源氏光公トモ申一子也〕

1 かきりとてわかるゝ道のかなしきにいかに○〔補入―□〔判読不能〕〕ほしきは命なりけり

御休所かくれて後鞞負の命婦して母きみにつかはしける

〔延喜帝〕院御製

2 宮城野の露ふきむすふ風のをとに小萩かもとを思ひこそやれ

内の御つかひにて御休所の母のもとにまうて、まちおはすらんと
〔一ウ〕

いそきかへるに月はいらかたちかき空きよき風涼しく吹て草
むらのむしの聲くもよほしかほなりければ

鞞負の命婦〔女名也〕

3 鈴むしの聲のかきりをつくしてもななきよあかしふる涙かな

御休所の母(接政太政大臣女)

4 いと、しくむしのねしけきあさちふに露をきそふる雲のうへ人

こはきかもととありける御返(故院女御)

5 あらき風ふせきしかけのかれしより小萩かもとそしつ心なき

命婦かへりまいりて御返奏しけるにむかしの御かたみなる

┌(2才)

御くしあけのてうとたつ物をたつねけんしるしの／かんさしな

らはおほすもかなしくて

院御製

6 尋ゆくまほろしもかなつてにてもたまのありかをそことしるへく

御休所かくれての秋月を御らんして

7 雲のうへも涙にくる、秋の月いかてすむらんあさちふの宿

六条院(此君光源氏ト申事／コマウト云物申也)日のカ、ヤク

コトクニ／ウツクシカリシ御姿也)元服し(此時小紫平組^{士_藏也}希也)

リ)給ける時御さかつきのつゐてにひき／いれの大臣にたまは

せける(此時被成源氏云々／同葵上逢初 彼大臣女)

8 いとけなきはつもとゆひになかきよを契る心はむすひこめつや

┌(2ウ)

御返し 撰政太政大臣(ヒキイレ大臣云／源氏

烏帽子文)

9 むすひつる心もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあせすは

箒木(十四首 此卷雨夜ノシナ定^{物語共}アリ是人ノ善悪ヲサタメラレ

キ)

女にゆひをくはれてよめる

左馬頭(頭中將 葵上兄敷)

10 手を、りてあひみしことをかそふればこれはかりやは君かうきふ

し

かへし

馬頭妻

11 うきふしを心ひとつにかそへつ、こや君か手をはなるへきなり

内よりまかりいつとて馬頭とひとつくるまにて

しひたる所へまかりけるに庭のもみちもふみ分たる／跡なく

てあはれなりければきくを、りて

12 ここのねもきくもえならぬやとなからつれなき人をひきやとめつ

〔見せ消チーけ〕る

よみ人しらす

13 こからしに吹あはせめる笛のねをひきと、むへきことのはもなし

前^(3才)大政大臣中將に侍し時もの申けるに久しく／おとつれさりけ

れはなてしこをおりてつかはしける

ゆふかほの上(三位中將女)

14 山かつのかきほあるともおりくにあはれをかけよなてしこの花
かく申たりければやかてまかりてよめる

┌ (3ウ)

〈散位^{マゴ}大臣是也〉前大政大臣〈撰政大^{マゴ}政大臣男／母三条大宮^{政御孫}〉

15 さきまじる色はいつれとわかねともなをとこなつにしく物そなき

返し ゆふかほのうへ

16 うちらはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹そふ秋もきにけり

博士^{文ハカセ}のむすめのもとにまかりてよめる

〈右馬頭〉藤式部丞〈シナ定ノ人数〉

17 さ、かにのふるまひしるき夕暮にひるますくせといふかあやなき

┌ (4オ)

かへし〈かくひると云物をくひてくさきによりて物こしにいひ
かはしけると南／是等の事とも源氏に／物語共申せし内也〉

よみ人しらす

18 あふ事のよをしへたてぬ中ならはひるまもなとかまはゆかるへき

中将におはせし時うつせみのやとりの御かたたかへ〈上臈ハ四

季方違在之〉の／あかつき〈方違卯月歎〉

六條院〈故院第二御子／御母桐壺御休

所〉

19 つれなきをうらみもはてぬしの、めにとりあへぬまでおとろかす
かな

御返し

うつせみ〈又は、き、〉〈権中納言左
衛門督女／葵上兄也〉

20 身のうさをなけくにあかて明る夜はとりかさねてそねもなけれ
る

〈あるし伊与介は君のおはしますかたに殿ゐしたるに源氏しの
ひくくにな共ねたる所ちかく／我御うへをそ云なるしつまるほ
とに忍入て／とかくの給に女おもひかけす思てけり〉

六條院

21 みし夢をあふ夜ありやとなけくまにめさへあはてそころもへにけ
る

┌ (4ウ)

またわたり給へるにわたとのかくろへさりけるをり／つかは
しける〈伊与介家は中河わたり也今の京河也〉

22 は、き、の心をしらてその原の道にあやなくまとひぬるかな

〈伊予介か妻となる事をかなしみ身を卑下し給てよめると也終
に源氏には／不逢人也〉

かへし うつせみ

23 かすならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、
きき〈此哥によりて箒木と名也〉

空蟬(二首)

〈うつ蟬弟童有しを源氏被召て殿上せさせ其後彼人を同車にて
よるまきれ忍給し也〱此時先童空蟬ま、女と碁をうちし也〱此
ま、女西の方と〱云に此時逢給〱一夜の契是也〱

またうつせみのもとへおはしたるに猶つれなくてはいかくれに
〱ければかのぬきすてたるうす衣をとりて出給さし〱はへたる
御ふみにはあらてた、うかみのかたつかたにかき 〔(5オ)〕

すさみ給けり 六條院

24うつせみの身をかへてける木の本に猶ひとからのなつかしきかな
その御た、うかみにかきそへたる

25うつせみのはにをく露の木かくれてしのひ〱にぬる、袖かな

夕顔(十九首 伊与介死テ後尼ニナル源氏不使ニ被思召ニ條院
東對ニスマセラレケルト南〱玉カツラ箒木卷ニ頭中将語出セシ
姫君事也是致仕大臣女也)

六條院中将におはせし時五条わたりにて隨身して〱ゆふかほお
らせられるに彼家よりさし出しける扇に

ゆふかほ(致仕大政大臣妻〱三位中将
女)

26心あてにそれかとそみるしら露の光そへたる夕かほのはな

〔(5ウ)〕

御た、うかみにあらぬさまにかきなしてありつる随〱身して夕
かほにつかはしける 六條院

六條院

27折てこそそれかともみめたそかれにほの〱みゆる夕かほの花
六條院伊勢の宮す所におはして給中將の〱君御をくりしけ
るうちとけぬもてなしめさまし〱くみ給て

28さく花にうつるてふなはつ、めともおらて過うきけさのあさかほ
御かへし 伊勢御休所中將 〔(6オ)〕

御かへし

29あさ霧のはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとそみる

五条わたりにてみたけしやうしんのおかみをき、給て

六條院

30いはそくかおこなふ道をしるへにてこんよもふかき契たかふな
かへし 夕かほのうへ

かへし

31さきのよの契しらる、身のうさに行すゑかけてたのみかたさよ

夕かほのうへいさなひ出てなにかしの院へおはしける〱あかつ

き 六條院

32いにしへもかくやは人のまとひけむ我またしらぬしの、めの空

〔見セ消チーみち〕

〔(6ウ)〕

御かへし 夕かほ

33山のはの心もしらてゆく月はうのはの空にて影やたえなむ

かの院にてもろともになかめくらしてしのひ給し御さまも／あ
らはれにける後

六条院

34夕露にひもとく花はたまほこのたよりにみえし花にこそ有けれ

御かへし

ゆふかは

35光ありとみし夕かほのうは露はたそかれときのそらめなりけり

〔清水邊へ惟光取こしらへ送りけるとなんむなしきをうは蓮に

つゝみて車に入／右近ものりけるこそあさましけれ〕

夕かほのうへかくれて後空かきくもり哀なる夕暮に

六条あん

〔(7オ)

36みし人のけふりを雲となかむればゆふへの空もむつまじきかな

夕かほの露きえにし御物おもひの比久しくおとつ／れ給はさり

ければおほしわすれぬるかと心みに申／ける

うつせみ

37とはぬをもなかととはてほどふるをいかはかりかはおもひわつ

らふ

六条院

38うつせみの世はうき物としりにしをまたことのはにかゝる命よ

かのもぬけのおり心ならずこらんせし女のもとへたか／やかな

るおきにつけてこ君してつかはしける

〔(7ウ)

39ほのかにも軒はの萩をむすはすは露のかことをなにかけまし

御かへし〔空蟬にはまゝ、むすめ也〕

伊与のかみか女

40ほのめかす風につけても下萩のなかはは霜にむすほ、れつゝ、

夕かほの四十九日の法事に誦経せさせ給とて／しのひててうせ

られけるはかまのこしに

六条院

〔右近ト云女房は夕顔上／ツカイ給し人也源氏ソノ／ユカリト

不便ニシテメシツカ／ハレケルトナンハツセニテ／玉カツラミ

シリテ御使申／セシ人是也〕

41なく／もけふは我ゆふしたひもをいつれのよにかとけてみるへ

き

うつせみ伊与のかみにくしてたりけるにたむけ／せさせ給と

てかのうす衣もとりそへられけるたもとに

〔(8オ)

42あふまでのかたみはかりと思ひしにひたそら袖のくちにけるかな

御かへしの御つかひはうちをきて歸りにければこ君してそ／た

てまつりける

うつせみ

43せみのはにたちかへてけるたひ衣かへすをみてもねはなかれけり

夕かほはかくれうつせみはくたりにけるのち冬たちける／日い

つしかと空のけしき哀なるになかめくらし給て

六条院

44 過にしもけふわかるゝもふた道に行かたしらぬ秋のくれかな

若紫(廿五首) 北山ニテ物語共富士ノ山ナニカシノタケスマ明
石ノ事ヲモ云出ノセシト也此時明石入道女ノ事ヲモ語シト也

「(8ウ)

六條院中将におはせし時わらはやみにわつらひて北山にノ旅ね
し給しおり彼僧都のもとを御覽しければむらさきのノうへのす
ゝめの子にかしてむつかりけるをきゝてよめる

むらさきのうへのうは(北山僧都か

妹)

45 おめたゝんありかもしらぬ若草をゝくらす露そさきえん空なき

かくいひけるをきゝてまへにゐたりけるおとこの申ける

よみ人しらす

46 はつ草のおいゆくすゑもしらぬ身「見せ消チ一ま」にいかてか露
のきえんとすらん

北山にてむらさきのうへのうはにつかはしける 「(9オ)

六條院

47 はつ草の若はのうへをみつるより旅ねの袖も露そかはかぬ

返し 　　むらさきのうへのうは

48 枕いふこよひはかりの露けさをみ山のこげにくらへさらなむ

おなし所にて山おろし瀧のをとにひゝきあひてノいとあはれな

りければ

49 吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよをす瀧のをとかな

おなしおりよみ侍ける

北山のそうつ

50 さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心はさはきははする

「(9ウ)

おなし所にて庭の桜のいとおもしろきを御覽して

六条おむ

51 宮人にゆきてかたらむ山桜風よりさきにきてもみるへく

御返し 　　そうつ

52 うとむくゑの花まちえたる心ちしてみ山桜にめこそとまらね

わらはやみおこたり給ければかへり給なむとておほゝきみなと

参りけるおり御かわらけたまはりてよみ侍ける

北山のひしり

53 おく山のむろのとほそをまれにあけてまたみぬ花の色をみるかな

「(10オ)

そうつのもとなるちいさきわらはしてむらさきのうへのうは

につかはしける 　　六条院

54 夕ま暮ほのかに花の色をみてけさは霞のたちそわつらふ

御かへし 　　むらさきの上のうは

55まことにや花のあたりは立うきとかすむる空のけしきにそとふ

北山より帰り給て又の日そうつものにつかはしける／＼中にち
いさくひきむすひて

六条ぬむ

56おもかけは身をもはなれず山桜心のかきりとめてこしかと

〔(10ウ)〕

御かへし

むらさきのうは〔見セ消チーへ〕のう

は

57あらしふくおのへの桜ちらぬまを心とめけるほとのはかなさ

北山へこれみつの朝臣してつかはしける

六條院

58あさか山あさくも人をおもはぬになと山の井のかけはなるらん

御かへし

むらさきのうへのうは

59くみそめてくやしと聞し山の井のあさきながらやかけをみるへき

中将におはせし時かきりなくしのひたる所にて／＼くらふの山に

やとりもせまほしけれとあやにてなるみしか夜 〔(11オ)〕

さへほとなかりければ中／＼にて

六條院

60みてもまたあふ夜まれなる夢のうちにやかてまさる、我身ともか

な

むせかへり給さままさかにいみしければ御かへし

薄雲ぬむ〔先帝御女／御母中宮〕

61よかたりに人やつたへむたくひなくうき身をさめぬ夢になしても

六條京極なる故按察大納言のふるさとに北山の／＼尼公のわつら
ひけるとふらひにおはしてまたの日つかはし／＼ける

六條院

62いはけなきたつの一こゑ聞しよりあしまになつむ舟そえならぬ

〔(11ウ)〕

きえんかたなきときこえし夕おほしいて、

63手につみていつしかもみむむらさきのねにかよひける野への若草

〔此哥より紫の巻と云也〕

尼うへかくれにけるとふらひにおはして少納言のめのとに

64あしわかのうら舟〔見セ消チーに〕みるめはかたくともこはたち

なからかへる浪かは

御かへし

少納言のめのと

65よる浪の心もしらてわかの浦にたまもなひかんほどそうきたる

京極の宮す所におはしてかへまにいとしのひてかよ／＼ひ給ける

女のもとのみちなるをおほしいて、門た、／＼かせけれと聞つく

る人なかりければ御伴にこゑある 〔(12オ)〕

人してうたはせける

六條るむ

68 ねはみねとあはれとそ思ふむさしの、露わけわふる草のゆかりを

かへし(藤壺更衣めい也)

紫のうへ(兵部卿宮御女/母按察大納言女)

言女

69 緋色衣着給事在之/九月にうはにをくれ十月に二条院へ迎へ給此時依服緋色衣わさと/朝のほとちと着給し也

69 かこつへきゆへをしらねはおほつかないかなる草のゆかりなるらん

(おさなき時より母にはなれ給て後うはにそたてられ給し也)

(紫上四十五ニテ隠給此時/源氏五十五[見七消チ一三]雲隠)

遁世事也)

末摘花(十四首)

(于時二月十六日事也) 頭中將と聞えし時六條院もいまた中將におはせしかは/侘人と云事あり) ひたちの宮にかくろへいりてのちちかき紅梅に立より/給けるにもとより又たちかくれてふりすて給つらさに

御をくりし侍とて

前太政大臣(葵上兄也是も末摘花に/心を懸し人也源氏忍給/御跡をみあらはして此哥を/奉るとなん)

70 もろともにおほうち山はいつれといるかたしらぬいさよるの月

返し

六條院

71 里わかぬかけをはみれとゆく月のいるさの山はたれかたつぬる

ひたちの宮におはしてとかくの給はずれと御いらへも/なかり

ければ

72 いくたひか君かし、まにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに

六條院わたり給てたまたすきくるしとの給をかた/はらいたし

と思てさしよりておしへきこえける

常陸宮侍従

73 かねつきてとちめむことはさすかにてこたへまうきそかつは

わりなきイ
あやうき

ひとつてにはあらぬさまにきこえなすもなか/めつら/しけ

れは又かくの給ける

六條院

74 いはぬをもいふにまさるとしりなからおしこめたるはくるしかり

けり

かしこにおはしてつきの日の夕あめふりけるにすゑ/つむはな

につかはしける

75 夕霧のはる、けしきもまたみぬにいふせさまさるよるの雨かな

「(13ウ)

御かへしれいの侍従そをしへきこへたるむらさきの／かみのいと、しへたるに

すゑつむの宮〈故常陸宮御女／御母大
貳北方姉〉

76 はれぬまの月まつ里を思ひやれおなし心になかめせずとも

おなし所におはして 六條院

77 朝日さす軒のたるひもとけなからなとてつら、のむすほゝらん
おなし所にてかきあつかりのおきな^いのいとさむけなる／をみて
わかきものはかたちかくれすと誦給て

78 ふりにけるかしらの雪をみる人もおとらすぬる、あさの袖かな

┌ (14オ)

太輔^(マ)の命婦して六條院へしやうそくたてまつ／られける御消息
みちのくにかみのあつこへ(見せ消チーえ)たるかにほひ／は
かりはしみふかきにかきて

末摘

79 から衣君か心のつらければたもとはかくそそほちつ、のみ

この御ふみひろけなからてならひに

六條院

〈此哥によりて末摘花名也〉

80 なつかしき色ともなきになに、このすゑつむ花を袖にふれけん

この御てならひをみけるかいとおしき物からおかしう

《脱葉》

86 いかさまにむかしむすへる契にてこのよにかゝる中のへたてそ

六條^いみん御事女院のおほしなけきけるさまをみて／まつりて

王命婦

87 みても思ふみぬはたいかになけくらむこやよの人のまよふてふや
み

冷泉院のいまいはけなくおはせしをはしめて／みたてまつり
て後わか御方にかへり給てせん／さいの中にとこなつのさき出
たるをおらせて命婦して／女院へ奉られける

六條院

88 よそへつ、みるに心はなくさまで露けさまさるなてしこの花

┌ (15オ)

命婦御らんせさせてた、ちりはかりこの花ひら／にときこゆれ
はわか御心にも哀におほししらる、／ほとにて御返し

薄雲院

89 袖ぬる、露のゆかりとおもふより猶うとまれぬやまとなてしこ

六條の院三位中将と聞えし時いか、おほし／けんもりこそ夏
との給ければ申ける

典侍源朝臣

90 君しこはたなれの駒にかりかはむさかり過たる草はなりとも

返し 六条院 「(15ウ)

91 さ、わけは人やとかめむいつとなく駒なつくめる杜の木かくれ

夕立の名残す、しきよるのまきれに六条院／三位中将と申ける

か温明殿のわたりをた、／すみ給にひわをいとおもしろくひき

てゐたり／ければきみまたあつまをしのひやかにうたひて／た

ちより給へるに申ける(源氏あつまやうたひてうそふき給ふ)

〈此女房于時歳五十七八の人歟源氏十九／計の御事にてやたは

ふれ給ふと也〉 源ないしのすけ(琵琶也上手也)

92 立ぬる、人しもあらしあつまやのうてもか、るあまそ、きかな

返し 六条院 「(16オ)

93 人つまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりもなれしとぞ思

ふ 頭中将ときこえし時源ないしのすけのも□〔訂正〕とにて／

六条院おとしたてまつりしをりわりなくひく／しろひてほころ

ひたえにければよみ侍ける

〈後までのわらひくさとなり給也〉

前太政大臣(于時頭中将也)

94 つ、むめるなやしるからむ引かくしかくほころふる中のみとは

返し 六条院

95 かくれなき物としる／夏衣きたるをうすき心とぞみる

その時おちとまれる御さしぬきひとへなとたて 「(16ウ)

まつるとて 源ないしのすけ

96 うらみてもいふかひそなきたちかさね引てかへりしなみのなこり

に

返し 六条院

97 あらたちし浪に心はさはかねとよせけむ磯をいか、うらみぬ

かのほころひにけるはた袖を頭中将のもとより／奉りたりけれ

はまたおひをその色のかみにつ、みて／つかはすとて

98 なかたえはかことやおふとあやうさにはなたな(つ)おひをとりにてたに

みす

立かへり又かく申ける

前太政大臣 「(17オ)

99 君にかくひきとられぬるおひなればやかたたえぬる中とこたへん

ふちつほきさるのくらゐにさたまり給て入内の／御ともつかう

まつり給けるに 六条院

100 つきもせず心のやみにくる、かな雲ゐに人をみるにつけても

花宴(八首)紅葉賀の次年の春大内に花みあり南殿桜盛に月景(つ)雲客題を賦詩作給也

花のえんの日六条院の御事共さまくおほす／事ともありて御
めとまりければ

うす雲のゐむ

101 大かたに花のすかたをみましかは露も心のをかれましやは

「(17ウ)

弘徽殿の三口にておほろ月よの内侍のかみへ(朧月よにしく物は
なきと詠めし女房の聲を源氏聞給て／おもしろくゆふにおほし
めしてかくよみ給と也)

六条院

102 ふかきよの哀をしるも入月のおほろけならぬ契とそおもふ

返し

朧月夜尚侍(東宮御母弘徽殿の御妹)

六君とて東宮へまいる／給とてもてな
し給し人也(花宴の舞御らんせんと
て内へまいる給をそのまゝと、まり給
し也)

103 うき身よにやかてきえなは尋ても草の原をはとほしとそ思ふ

やかてまたことほりなりやきこえたかへたるもし／かなどの給

て 六条院

(于時二月廿日比歎)

104 いつれそと露のやとりをわかつまに小篠か原に風もこそふけ

冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集上』(翻刻)

内侍のかみのとりかへたりし扇にかきつけ給ける 「(18オ)
(内侍扇)此扇繪桜三重にかすめる空の月水にうつりたる所を
書也)

105 よにしらぬ心地こそすれ在明の月のゆくゑを空にまかせて

右大臣に侍し時藤宴し侍しに六条院おはせさり／ければくちお
しくて御子四位の少将して彼院に申ける

二條太政大臣

106 我やとのはなしなへての色ならはなにかはさらに君をまたまし

弘徽殿の朧月夜の後二条のおほいまうちきみ／藤の宴におはし
て内侍のかみのよりゐたりける／戸口に尋より給て

六条院

107 梓弓あるさの山にまどふかなほのみし月の影やみゆると

「(18ウ)

かへし ないしのかみ

108 心いるかたならませは弓はりの月なき空にまよはましやは

(此人は女御にも終に立す内侍かみにて過し也)

葵(廿四首)

六条院大将におはせし時斎院の御祓つかうまつり／給をしのひ
てみ侍けるにさゝのくまにてたに／あらねはにやつれなく過給
にも中くなりければ

伊勢御休所（大臣女ノ御母六条御息

所）

（此葵ノ上ハ源氏十二ニテ元服ノ夜関白ノ簪ニ成給ふ也ノ兄朱雀院ノ一御ハラヒメ宮賀茂ノイツキノ宮ニソナハリノ給ワイミシキ事共也賀茂祭ノ日見物車共アリシニノ此時葵ノ上ノ御車ハ時メキ給御事ナレハヒ、シキ事共也然六条ミヤス所ノ御車ノナラヒ争トイヘトモウシソシナントシテ無面目躰也シヲ御息所口惜ヲホシメシテ彼葵ノ上ニウラミフカクノシテ終ニツキコロシ給也）

109 かけをたにみたらし河のつれなきに身のうきほとそいと、しらる

まつりの日むらさきのうへかみそき給とて

（葵ノ上八月五日ノ死給也此時除目ノ用意アリシモヤフレケルトナム此時車ニ葵〔見セ消チ〕紫ノ上モノリ給フシ也）

┌（19オ）

六条院

（夕霧大将は彼葵上ノ御子也）

110 はかりなきちいろのそのみるふさのおひゆくすゑはわれそみる
へき

御かへし（此紫の上をは十歳よりとりてそたて給となり）

むらさきのうへ

111 ちいろともいかてしるらむさためなくみちひる塩の〇（補入
の）とけからぬに

祭の日物見ける女車より扇にかきて六条院ノへたてまつりける

源内侍のすけ

113 かさしける心そあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを
返し 六条院

┌（19ウ）

112 はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふを待ける
つらしとやおもひけん又かく申ける 源ないしのすけ

114 くやくしくもかさしけるかな名のみして人たのめなる草は、かりを

六条院わたり給て暮つかた御ふみたてまつられたりノける御返

し 御休所

115 袖ぬるゝ恋ちとかつはしりなからおりたつたこのみつからそうき

又御返し 六条院

116 あさみにや人はおりたつ我方は身もそほつまでふかき心を

┌（20オ）

夕霧の大臣のおほいまうち君の母わつらふノ事おもく成にける
比人につきて 御休所

御休所

117 なけきわひ空にみたる、我玉をむすひとめよ下かへの妻

夕霧の大臣の母身まかりにけるのち父おと、の／やみにくれま
よふさまもことはりにいみしければ空をのみ／ななめ給て

六條院

118 のほりぬる煙はそれとわかねともなへて雲の哀なるかな

あふひのうへかくれにけるのちかきりある事にて 「(20ウ)
に○ふめる御そき給も夢の心地してわれまきた、ま／しかはふ
かくそ、めましとおほすもかなしくて

119 限あれはうす、み衣あさけれと涙そ袖をふちとなしける

その、ち菊のけしきはめるえたにあおにほひのかみ／なる文つ
けていつくよりともなくてさしをかせ／ける

御休所

120 人のよをあはれときくも露けきにをくる、袖を思ひこそやれ

御かへしむらさきにはめるかみに

六条院

「(21オ)

121 とまる身も消しもおなし露のよに心をくらん人そはかなき

頭中將ときこえし時あふひのうへかくれてのち／六条院の御方
にまうてたりしに雨とやなりけん／雲とやなりにけんと口すさ
み給をき、て

前大政大臣

122 雨となりしくる、空のうき雲をいつれのかたとわきてななめん

御返し

六條院

123 みし人の雨となりにし雲るより「見せ消ちさへ」いと、しくれ
のかきくらすかな

そのころかれたる下草のなてしこなとやらせて 「(21ウ)

わか君のめのとの宰相の君して大宮にきこえ／給ける

124 草かくれまかきのにこるなてしこをわかれし秋のかたみとそみる
御返し
あふひのうへのは、(故院御いもと

／撰政室

125 いまもみて中／袖をくたすかなかきほあれにしやまとなてしこ

おなし比哀なる秋のゆふへそいろいろのかみにかきて／あさかほ

の齋院に

六條院

126 わきてこの暮こそ袖は露け、れ物おもふ秋はあまたへぬれと

御返し

齋院(桃園式部卿宮御女／あさかほの

宮と申此御事也)

「(22オ)

127 秋霧に立をくれぬと聞しよりしくる、空もいか、とそ思ふ

夕霧の大臣の母かくれにける後かのち、おと、のも／とを出給
けるに御てならひともの中なるさふす／まふるきまくらたれ
と、もにかとあるところに

六條院

128 なき玉そいと、かなしきねしとこのあくかれかたき心ならひに

おなしおりに霜のはなしろしとあるところに

129 君なくて塵つもりぬるとこ夏の露うちはらひ幾世へぬらん

〔此時紫ノ上十五源氏ハ廿二歳歎新枕其夜十月歎其日戌ノ日と

也三ヶ日御祝子ノ日ニアタリテ餅ナント奉リ／ケル惟光取成／

三日一トハ三杯ヲ／一饌ニスヘテ鶴ノ口ニ箸ラクワヘサセテ出

ト也少納言乳母トハ此紫ノ上ノメノト也〕

むらさきのうへにとけそめ給へる朝引むすひたる ㄥ（22ウ）

〔此祝ハ忍事也弁君ト云人取ツキテヨ御女房達モシラス朝ニコ

ソミナ心ヘケルトナム〕

文の御まくらにありけるを女君とりてみ給ければ

〔三日一 三日夜ノ餅 亥子 子の子〕

130 あやなくもへたてぬるかなよをかさねさすかになれしよるの衣を

夕霧の大臣母みまかりにし又のとしの正月／一日彼おと、のも

とにおはしてしやうそくなときかへ給て

131 あまたとしけふあらためし色衣きては涙そふる心ちする

御返し あふひのうへのは、

132 あたらしきとしともいはすふる物はふりぬる人の涙なりけり

榊（三十三首）

齋宮群行ちかくなりける比六條院野々宮にまうて給て」（23オ）

〔伊勢下着／アラントテ先／清水ヘマイリ／野々宮ニウツロイ

／給フ比ハ九月／十六日の夕月夜花ヤカニサシ出タルニ細車ノ

シノヒヤカナルニ／彼宮ヘ源氏マイリ給フ中メキタル柴垣黒

木／鳥る神さひて浅茅カ原モカレ／ニ秋風／虫ノネニマカイ

タルモノノネタエ／キコヘテ火焼ヤハカリカスカナリ／コ、ニ

物思ハシキ人ノスミテナムト哀也御マヘニ榊ライサ、カララセ

テ御スミレノ中ヘサシ入テ御カタリ／ナムトシ給し哥也〕

榊を折てさしいれつ、かはらぬ色をしるへにて／こそゐかきも

こえにけれさもうくときこえ給へは

御休所

133 神垣はしるしの杉もなき物をいかにまかへておれるさか木そ

御返し 六條院

134 おとめこかありかとおもへは榊のかをなつかしみとめてこそお

れ

そのおりやう／＼明行空もことに物かなしければ

135 暁のわかればいつも露けきにはよにしらぬ秋の空かな

御返し 御休所 ㄥ（23ウ）

136 大かたの秋のわかれもかなしきにねな、きそへそ野への松虫

齋宮た、せ給ふあかつき木綿に付てたてまつられける

六條院

（この巻ニ御門十一^{制宮御殿}月ニ隠サセ給其比ヨリ源氏ハコトニフレテ
物ウクヲホシメシテ内侍カミノ事アラ／ハレテスマへ／下給
ふ）

137 やしまもるくにつみ神も心あらはあかぬ別の中をことはれ

さはかしき程なれと御返あり宮の女別当してそ／か、せられけ
る 秋好中宮（前坊御女冷泉院后御母六条

御休所）

138 くにつかみ空にことはる中ならはなをことはりをまつやいさめん

齋宮群行の日又も、しきをみ給てち、おと、／のことなどおほ
し出られければ 」（24才）

御休所

139 そのかみをさらにかけしとしのふれと心のうちに物そかなしき

齋宮二条院を過ぎ（訂正―さ）せ給けるに衾に付て御休所に

六條院

140 ふりすて、けふは行ともす、か川やせせの浪に袖はぬれしや

御返又の日関のあなたより

御休所

141 す、か川やせせの浪にぬれくすいせまで誰か思ひおこさん

齋宮御下の、ちあさほらけにうちななめひとり立給ふ

142 行さきをなかもやらんこの秋は相坂山に霧なへたてそ（24ウ）

院かくれさせ給てのち中宮三条の宮にわたり給ふ御むかへに

まうて、御前の五葉の雪にしほれて下葉枯たるを御らんして

式部卿宮（先帝御子／紫上ノ父）

143 かけひろみたのみし松やかれにけん下葉ちりゆく年の暮かな

そのおり御まへの池もこほりとちてひまなうみえ／ければ

六條院

144 寒わたる池のか、みのさやけきにみなれし影をみぬそかなしき

かくの給けるを聞て 王命婦

145 年暮ていはみの水もこほりとちみし人かけのあせもゆくかな

」（25才）

弘徽殿のほそ殿にしひてあかし給夜殿る申／こゑとら一と

そこしけるをき、て

朧月夜の内侍のかみ

146 心からかたく袖のぬる、かなあくとおしふる聲につけても

御返し 六條院

147 なけきつ、わか世はかくてすぐせとやむねのあくへき時そともな

く

又いかなるたよりかありけん薄雲院にまいりてなくく／うら

みてもかひなき心ちすれば

148 逢事のかたきをけふにかきらすはいまもいく代か恨つ、へむ

御返し

薄雲院

149 なかき世の恨を人にのこしてもかつは心のあたとしらなむ

諒闇のとし雲林院にて法文とならひて／日比おはせしころむ

らさきのうへにつかはしける

あさちふの〔擦消〕 六條院

150 あさちふの露のやとりに君を、きてよもの風にしつ心なき

御返ししろきしきに

むらさきのうへ

151 風ふけはまつそみたる、色かはるあさちかすゑにかよふさ、かに

雲林院におはしける比ちかきほとにて齋院ニ／たてまつられけ

るあさみとりのかみにゆふにつけて

六條院

152 かけまくはかしこけれともそのかみの秋おもほゆるゆふたきかなす暇

御返しかのゆふのかたはしに

齋院

153 そのかみはいか、はありしゆふたすき心にかけてしのふらんゆへ

院かくれさせ給てつきのとし八月十五夜王／命婦して六條院に

きこえ給ける